

★ 特別企画：左官を建築設計に活かす ★

インタビュー

本物を知り、本物に触れ、自ら建築を拵える

泉幸甫建築研究所 代表 泉 幸甫 氏に聞く

左官の大きな魅力の一つが自然素材である土や漆喰を建築意匠に活かせることだ。その職人の手から生み出される自然な表現は、我々の生活をより豊かなものへと変えてくれる。居心地の良い空間、環境に優しい素材。そうした自然素材や左官の技術を積極的に建築設計に活かしている泉幸甫建築研究所の泉幸甫氏に、左官を建築に活かすために何が必要なのか。話を伺った。
(編集部)

土に触れ、左官を知る

——左官を設計に取り入れた経緯を教えてください

私が設計を始めた45年ほど前は、ちょうど日本が高度成長期を経て、建築も合理化がどんどん進んだ時代です。外壁はサイディング、内装は壁紙へと建材の工業化が進んでいました。私は大学で建築学科に在籍していましたが、30歳までは造形(モノづくり)の世界にいて、テクスチャーや肌触りというものを身近に感じていました。ところが、建築設計の世界に戻ってみると、メーカーのカタログからサイディングやビニルクロスの品番を選ぶだけ。ものづくりの世界ではテクスチャーや感触をとっても大事にしていたから、大きな違和感を覚えました。

元々、目に優しく、手の感触になじむ自然素材というものが好きで、これを現代の建築にどのように活かしていくのか、それが建築人生の大きなテーマの一つになっていきました。ですから、左官の世界にはとても興味がありました。しかし、左官を現代建築に活かすにはどうしたらいいか、それにはあまりにも左官を知らなすぎました。最初は、何も分からなく、図面にモルタル下地の上に「漆喰」とだけ書くことから始まりました。

泉 幸甫

(いずみ・こうすけ)



【略歴】

1947年熊本県生まれ、日本大学大学院修士課程修了、千葉大学大学院博士課程修了、博士(工学)。1977年に泉幸甫建築研究所設立。

都立大学非常勤講師。2008より日本大学研究所教授、客員教授を務める。
「家づくりの会」代表、「家づくり学校」校長、「木の建築賞」審査員長などを務める。

「Apartment鶉(じゅん)」で日本建築学会作品選奨、「Apartment傳(でん)」で日本仕上学会作品賞・材料設計の追求に対する10周年記念賞、東京建築最優秀賞。泉が校長を務める「家づくり学校」が日本建築学会教育賞を受賞など受賞多数

主な著書に「住宅設計の考え方」彰国社、「建築家の心象風景—泉幸甫」風土舎、「住宅作家になるためのノート」彰国社など

主な作品に「螢遊苑」長府製作所記念館、Apartment惣、森の中の森の家、Apartment鶉、而邸、泰山館など

——左官の世界に触れたのはいつですか

暗中模索というのでしょうか、何をどうしたらいいのか分からないという状況でしたが、40歳くらいの時に東京の左官職人で、榎本新吉さんと知り合うことができました。それから数年間は榎本さんのところに訪ねて行って色々教えるを乞うていました。

左官が面白くなってきたのは、土に触れ、土を捏ねて塗るようになってからです。榎本さんに左官というのはどうやったらいいかと訊ねた時に「塗りゃー、いいんだよ」とか、